

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について

練馬区立光が丘さくら幼稚園長 岡上直子

幼児期の教育と小学校教育に関する国の教育課程の基準は、接続している。

- ① 国の基準である幼稚園教育要領と小学校学習指導要領は、接続している。
(国語科・言葉、音楽科・表現、図画工作・表現、生活科、道徳など)
- ② 幼稚園・保育所においては、教育要領・保育指針、小学校において、学習指導要領に示されていることが適切に実施されれば、円滑に接続するはずである。

幼児期の教育と小学校教育の違い

- ① 時間・空間の区切り
 - ・ 幼稚園・保育所では、時間・空間の区切りがファジーで、時によって異なる
 - ・ 小学校では、時間割によって区切られ、主に教室・体育館など、決められた空間で学習する
- ② 指導のねらいと評価の考え方
 - ・ 幼稚園の教員・保育士は、幼児の興味関心を捉え、遊び・学びの充実と一人一人の発達の状況との関連でねらいを設定し、評価する。
幼児の興味・関心の様子に応じてねらいを変更し、学びの評価に重点を置く傾向がある。
 - ・ 小学校の教員は、指導の目標を明確にして指導方法を選択し、授業を展開する。
一人一人の理解の状況に応じつつねらいに向かって単元(或いは1単位時間)の中で指導のねらいが達成できたか、一人一人の児童は学習の成果を評価する。
 - ・ 幼稚園・保育所も小学校も、関心・意欲・態度、思考力・判断力、技能・表現、知識・理解などの側面から評価している

なぜ、これほど接続の必要性が言われるのか

- ① 子どもたちの育ちの危機への対応の必要性
- ② 小学校生活の円滑なスタート・豊かな成長の困難さ

小1プロブレム等が生まれる背景として考えられること

- ① 生活環境の変化
 - ・ いつも大人が見守り安全確保している遊び場環境
 - ・ 子どもが群れて遊ぶ空間・時間、ファジーな世界の減少
- ② 便利さゆえの体験不足
 - ・ 車社会で、親も子も、体力的に頑張らなければならない体験が減少
 - ・ 状況によって違う行動が求められる体験(公共の乗物の中でのふるまいなど)の減少
 - ・ 自分の行動を周囲の流れ・リズムに合わせていく力がはぐくまれにくい
- ③ 自分の行動とかわりなく進行する環境 —— 多様な相互作用の体験不足
 - ・ どんなに注視しようと声を出して立ち歩こうと、関係なく進行するテレビ画面
 - ・ 望みどおりの結果を引き出すために何度でも中断、やり直し可能なコンピュータゲーム
 - ・ 一方的な感情の表出と機械的・無機質的な反応との相互作用

※ 根底にこういう課題があることを認識して、接続の在り方をトータルに考える必要性
幼稚園・保育所と小学校との交流の目的と成果の確認

- ① 教師の学び ← 円滑な接続につなげるために最も重要な「教師の学び」
- ・ 幼児・児童の発達の状況への理解
 - ・ 幼児期の教育と小学校教育に対する相互理解と学び合い
 - ・ 互いの教育内容・方法について関心をもつ = 教育課程の接続を意識する
 - ・ 交流で学んだことを、自園、自校の教育課程の改善に活かす
 - ・ 結果として幼稚園教育と小学校教育が円滑に接続し、連続性のあるものになる
- ② 幼児・児童の学び ← こちらだけが重視されがちな現状
- ・ 幼児——小学校の施設や授業の様子の理解、進学への期待 など
 - ・ 小学生——小さい子への思いやり、自らの成長への気付き など

幼児期の教育から小学校教育への接続を円滑にするための 本園の試み1

小学校との交流 (10月から1月)

<交流の内容>

1回目 幼稚園5歳児 小学校へ

- ① 出合いの会 (歓迎の言葉、歌など、互いに親しみの気持ちをもつことをねらい)
- ② 幼稚園児の小学生体験
 - ・ 小学校の教室や一年生の生活を知ることを中心とした内容小学生と幼稚園児がペアになって、教室で教科書を見せてもらったり教えてもらったりするランドセルと帽子を身に付け校長室まで歩いて、校長先生とジャンケンゲームなどをする
- ③ 校庭で一緒に遊んで、子供同士が親しみや憧れの気持ちをもって、さようなら

2回目 小学校の中を探検

- ① ペアの小学生に連れられて校内見学(年度によっては、学芸会・展覧会の参観)
- ② 大型のジャングルジムなどの複合遊具や雲梯など、幼稚園にはない固定遊具等で一緒に遊ぶ

3回目 1年生が 幼稚園へ

- ① 小学校の教員に幼児の興味・関心や幼児の力量が見えやすい活動内容
- ② 幼稚園児が共同製作した大きな動く乗り物に乗ってもらったり、こま回しやお手玉などで競ったりするなど、幼稚園の生活や遊びの様子を紹介する。

4回目

- ① 1・2年生とペアになって校内見学 (いろいろな学年・教科の授業を見学)
- ② 各教室を歩きながら説明を聞いたり、特別教室の先生から説明を聞いたりする
- ③ 1・2年生と一緒に、校庭や体育館で遊ぶ

<交流実施の現状と課題・留意点>

- ① 教育課程・指導計画への交流活動の位置付け
 - ・ 幼稚園側の幼小連携に関する期待は大きく、担任は積極的に取り組む
 - ・ 小学校の担任の関心や学級経営の状況等によって、取組み姿勢は年度により差が大きい
→ 幼保小の教育(保育)課程・指導計画の中にしっかりと交流活動を位置付ける重要性
 - ・ 互いの指導内容・方法の特性を知り自らの教育活動に反映するには、交流の継続が不可欠
- ② 幼児理解・児童理解の確認
 - ・ 教員は、交流の前に進め方等について熱心に検討し、丁寧に連絡している。
 - ・ 実施後は、評価反省・協議をして、幼児がどのような発見をしているか記録している。幼児の学びの確認が主、小学校教育に関し教員自身がどのような学びをしたか不明確
 - ・ 相互の教員による成果確認のための時間確保の難しさ(交流の目的意識との関連)
- ③ 教員の学びを意識化させる園長・校長の役割
 - ・ 小学校教員は、漠然と幼児の発達や技能を感じ取っているが、意識化されにくい

- ・ 園長・校長は、教員の気付きや学びを確認し、教育活動の改善に反映するように意識化する
- ④ 交流の成果を自校園の教育課程編成・幼小の接続に生かす
 - ・ 理解を深めたことを生かし、各幼稚園・小学校が自校の教育課程に、接続を明示する
 - 指導計画に確実に記載、具体的な内容・方法も
 - 道徳の全体計画 学習指導・生活指導等に関する項目への接続に関する記載
 - 連携・交流から接続へ
- ⑤ 研修の充実と研修の場づくりの工夫
 - ・ 教育委員会が幼小連携に関する研修を実施している。
 - ・ 小学校の教員が保育場を参観し、幼稚園教育の特性を学ぶ機会はまだ少ない現状
 - ・ 教員の力量に応じて研修の機会を作っていくことは、管理職の役割
(例 経験の少ない小学校教員が就学前の幼稚園の活動の様子を参観。担任と協議)
- ⑥ 交流の対象は、交流の目的によって異なる
 - ・ 1年生、5年生 など

幼児期の教育から小学校教育への接続を円滑にするための 本園の試み2

学びの連続性を確保するための本園の教育課程と評価

別添資料 平成 17 年度本園研究報告書「幼小の接続を視野に入れた教育課程の編成・実施

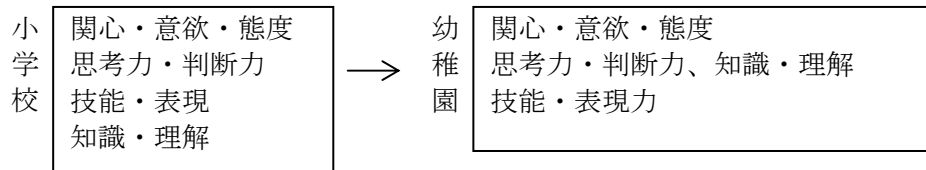
—夢中になって遊ぶ中での学びを考える— より

- ① 自己の育ちと協同性の育ちを重ねてとらえる「幼児の発達のプロセスの理解」
- ② 幼児期に体験させておきたい内容、育てておきたい内容を、3つの側面から抑える

- 情動的側面を中心とした育ち
- 知的側面を中心とした育ち
- 技能的側面を中心とした育ち

・ 関心・意欲・態度をはぐぐむための体験
 ・ 思考力・判断力、知識・理解力をはぐぐむための体験
 ・ 遊びを楽しくするための技能・表現力をはぐぐむための体験

- ③ 学びにつなげるために大切にしたい体験及び学びの評価を小学校教育における学習の評価の観点と関連させて考えた



- ④ 幼小の接続を視野に入れた教育課程の編成資料の作成、教育課程の編成・指導計画の作成
 別添資料「幼小の接続を視野に入れた教育課程の編成のための資料」

最後に

小学校入学までに、何を体験させておきたいか（育てておきたいか）

- ① 人や物事についての興味・関心（好奇心・意欲）
- ② 自分でやってみようとする・かかわろうとする力（主体性）
- ③ 人の話を聞き、その言葉を受け止めながら考えを進めていく力（思考力・判断力）
- ④ 自分の気持ちや考えを伝えようとする力（表現力）

夢中になって遊ぶ中での学びの評価

幼児は夢中になって遊ぶ中で、人間として生きていくための多様な学びを広げ深めている。これまで遊びに夢中になる 8 つの要因を探ったが、ここでは、幼児が夢中になって遊んでいる中に、どのような学びがあるのかをとらえる視点を探っていくことにする。その際、研究主題にも示している幼小の接続を視野に入れた教育課程の編成を目指し、幼稚園での学びと小学校での学習の違いをとらえながら、幼稚園での学びを探っていく。

(1) 幼稚園教育と小学校教育における学び

遊びを中心とした幼稚園教育は、教科を中心とした小学校教育とは内容や方法が異なっている。しかし、幼稚園教育も小学校教育も「確かな学力」や「豊かな人間性」、たくましく生きるための「健康・体力」からなる「生きる力」をはぐくむことをねらっている点は同じである。

また、教育課程に基づき、各時期の子どもたちの発達の特徴を踏まえた指導計画を作成し、専門家である教師が指導に当たるという点では、共通している。さらに、幼児が遊びや生活を通して学んでいることと児童が教科などの学習で学んでいることには、関連しているものがあると考えられる。そこで幼稚園教育における学びと小学校教育における学びについて考えた。

「学び」というと「勉強」「学習」というイメージが強くある。「学校で先生から教えられたことを学ぶ」のが「学習」ととらえられがちである。「幼稚園は遊ばせているだけで、学びがない。もっと教わることを増やして欲しい。」と、早期教育を望む声も一部の保護者から聞かれたりする。しかし、私たちは生活の中の学びとともに、幼児が主体的に人やものに関わって繰り返し広げる遊びの中にこそ、人間として生きていくための多くの学びがあると考えている。

幼稚園教育においては、幼児が生活や遊びを展開する中で、幼児一人一人の学びの内容は様々で、繰り返し積み重ねることが確かな育ちに繋がっている。この幼児期の学びは系統的に順序だてて行われるのではなく即物的、断片的である。しかし、確実に将来の論理的な思考を支える事物や事象のイメージや感覚をはぐくんでいると考える。

小学校教育では学習指導要領によって、各教科等のねらいや学習内容が系統的に示されている。そのねらいを踏まえ、各学校の実態に合わせて 6 年間を見通して計画的に指導している。即ち各教科等の指導において、何を学ぶのか目当てを明確にしており、児童はその目当てに向かって学習を進め知識として学び取っていくのである。

(2) 幼稚園教育における学びの評価の観点

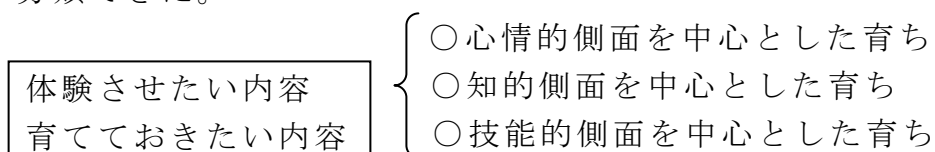
幼児期の学びは小学校の準備期間としての学びとして考えるのではなく、幼児期の特性を踏まえた遊びや生活の中の学びを全うさせることが大事であることと

らえている。

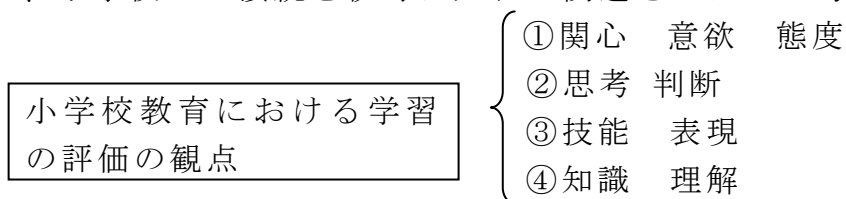
そのような幼児期の学びを確かなものにしていくために、私たちは日々の保育の中で、幼児の姿を読みとり評価を行い指導の方向性を見出している。その際、幼児が夢中になる遊びの中の学びに着目し確実にとらえていくために観点をもつ必要性を感じた。

そこで、2年間の発達の姿として自己と協同性の育ちから読み取った結果を「幼小の接続を視野に入れた教育課程編成のための資料」に位置付け、学びの充実にかかわる発達の過程<自己と協同性の育ちの面から>として表した。

さらに、その発達の姿に沿って**何を学んで欲しいかという教師の願い**を出し合い、**体験させておきたい内容**を明確にし、それらを整理するとおおむね以下の3つに分類できた。

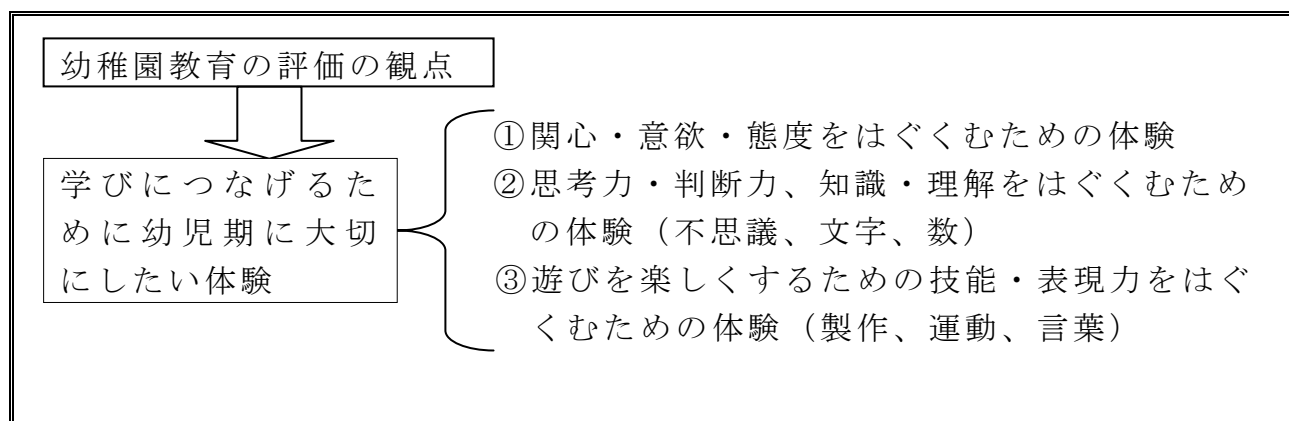


これらの3つの側面は、小学校教育における学習の評価の観点と共通な面があり、小学校との接続を視野に入れて関連させたいと考えた。



しかし、幼児は、行動しながら考えるので②の思考、判断と④の知識、理解をどのように見分けていけばよいのが難しかった。そこで②と④を一つの柱とし**②思考力・判断力、知識・理解**としてまとめることにした。学びに繋げるために経験させたい内容を小学校の評価の観点と同じ面から考え連続性をもたせることにしたのである。

即ち、学びにつなげるために幼児期に大切にしたい体験を以下の3つとすることにし、評価の観点とした。



(3) 学びにつなげるために幼児期に大切にしたい体験について

① 関心・意欲・態度をはぐくむための体験

幼児が自ら遊び夢中になって遊ぶ中では、心が動き、感じたり考えたりして楽しむ様子が読みとれる。例えば、好きな遊びが楽しいから繰り返したり自分のペースで遊び込んだり、みんなが集まると何か楽しいことがあるというワクワクドキドキ感を十分味わったりすることが次の関心・意欲・態度をはぐくむことにつながっていくととらえる。

特に幼児期において、幼稚園で楽しい遊びができるという実感や集まると楽しいことがあると実感することは、環境に対して、面白い体験ができそうだという期待につながり、興味関心を広げることにつながると考える。

また、友達と一緒にやったらこんなこともできたと自分を広げ自分を出しきる心地よさや、何かに取り組んだ時にとことんやってみる面白さを実感することは、物事に対して積極的に向かう関心・意欲・態度を育てることにつながると考えた。

写真(略)

② 思考力・判断力、知識・理解をはぐくむための体験

幼児は夢中になって遊ぶ中で「あっ、そうか」「なるほど」など体感したり、感覚的、断片的に何かを納得したり獲得したりすることがある。それは思考力・判断力、知識・理解の基となる体験であり、体験に裏打ちされた知性ともいえる。そのような体験を②思考力・判断力、知識・理解をはぐくむ体験ととらえた。

例えば、入園当初は砂場でひたすら水を流したり、砂と水を混ぜてかき混ぜたりして楽しむ姿がある。その姿から水の気持ちよさを感じたり、流れる様子を面白がったり不思議がったりしていると読みとれるが、そのようにひたすら感じることを味わうことが、将来、水の性質を学ぶときに具体的にイメージして科学的思考を支えることになる。そこでひたすら感じることは、感性だけでなく思考力の大切な土台として考えることにした。

特に自然とのかかわりの中では、多様な感覚を味わいひたすら感じる体験を重視したいと考える。また、文字や記号、社会のルールなども、物事を理解する上で大切な土台と考え、幼児期に大切なことととらえた。さらに、不思議だ、どうなっているのだろうと考える機会がもてるよう、きっかけ作りを工夫することにした。

写真(略)

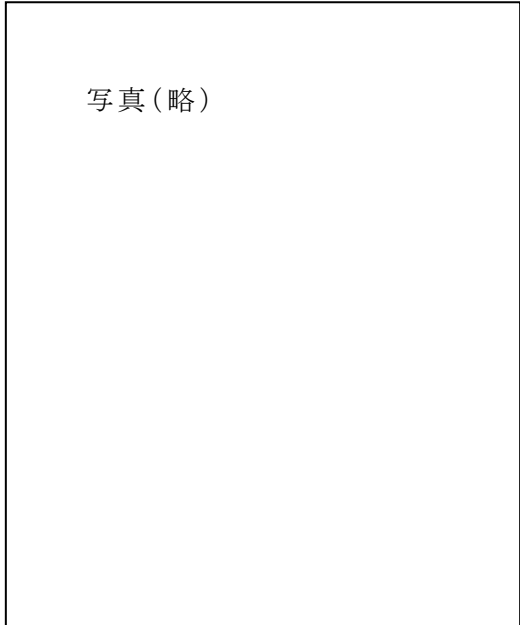
③ 遊びを楽しくするための技能・表現力をはぐくむための体験

やってみたいなと心が動き遊び始めても、うまく道具が使えなかったり、扱いが分からなかったりして遊び続けられないことがある。そのようなことが起こると夢中になって遊ぶことができず、学びの機会を逃すことになる。その意味で、技能や表現力を育てていくことは大切である。

そこで私たちは遊びを楽しむ中で、結果として遊具、用具を扱う技能や、自分の思いやイメージを表す表現力が身に付いていく体験を幼児期に大切にしたいと考えた。すなわち身近な用具を使う楽しさや体を動かす心地よさなど、幼児が楽しむことに重点をおきつつ、

徐々に難しそうだけれどやってみたいと思うような体験を積み重ねるように考えたのである。こうした体験を繰り返すことによって、更に夢中になる遊びが展開できるように遊具や用具を使える技能や表現力を身に付けていくことが重要であると考えた。

以上のように、評価に関する3つの観点から、幼児にとって「生きる力」をはぐくむために**体験させておきたい内容**、**育てておきたい内容**を明確にし、幼小の接続を視野に入れた教育課程編成のための資料に位置付けた。



(4) 学びの評価の具体例

これまで述べてきたように、幼稚園教育における学びの評価については、学校教育における学習の評価の観点を参考にしつつ、体験させたい内容と関連させながら考えた。

しかし繰り返しになるが、幼児教育の目指す「遊びを通しての学び」と小学校以降の「教科を通しての学習」とは、つながっているが異なるものである。私たちは3つの観点を「評価の基準」として表しているのではなく、学びの基である体験を確かめ、それがどのような学びにつながっていくのかを明らかにする「評価の観点」ととらえることにした。

幼稚園教育における学びの評価は、到達度ではなく、幼児が活動した結果として身に付けていることや学び取ったことを評価している。幼児に対してねらいはもっているが、そのねらいに到達することに重点があるのではなく、そこに至る中でどれだけ多くのことを感じ味わい、ふに落ちるかが大切なことであり、そこを評価していくことを目的としている。

遊びの中で、一人一人の幼児が何を学んでいたかを評価し、評価の積み重ねで一人一人の成長を評価していく例を次に挙げる。

① 泥団子作りに夢中になっているA児とB児の評価

A児は毎日泥団子作りを繰り返し、いつでも手には泥団子がある。今日も砂場付近の土を水で柔らかくして丸め、その後は保育室前の乾いたさらさらの土を丁寧にまぶし固めていった。B児はA児の様子をここ数日見ていた。今日はA児に「ここの土と水と混ぜるんだよ」と教えてもらい作り始めた。B児は、両手で土をぎゅっと丸める。A児のように丸くはならないが、いびつな形の泥団子を持ちうれしそうである。A児は掌に収まる滑らかな球状の泥団子を大事そうに持って園内のいろいろな場所のさらさらの土をまぶしている。

上記の事例の中でA児、B児、それぞれが学んでいることをとらえる。

< A児の姿の読みとり：評価 >

領域	関心・意欲・態度をはぐくむための体験	思考力・判断力 知識・理解力をはぐくむための体験	遊びを楽しくするための技能・表現力をはぐくむための体験
健康			
人間関係			親しみをもって話しかける
環境		土が園内の様々な場所によって性質が違ふことが分かる	
言葉			
表現	きれいな球状が作れることがうれしい		泥団子作りの手順を相手に分かるように伝える

< B児の姿の読みとり：評価 >

領域	関心・意欲・態度をはぐくむための体験	思考力・判断力 知識・理解力をはぐくむための体験	遊びを楽しくするための技能表現力をはぐくむための体験
健康			
人間関係	友達がしていることに興味をもつ		
環境	泥団子に魅力を感じ、興味をもつ	友達が教えてくれた場所の土を使って作ると良いことを知る	
言葉			
表現		球状の団子の作り方を知る	両手を丸くして団子を作る技能

このように泥団子作りを同じ場で同じように楽しんでも、一人一人のこだわりや興味関心は違い一人一人の違った学びがある。

② 幼児期の学びの積み重ね

A 児 B 児の読み取りのように、一人一人の幼児の学びを教師が読み取り、評価を一覧表に記入したり意識してとらえたりすることで、指導の方向が明確になる。それによって教師は、幼児の発達に即した教材を選択し、環境を的確に構成することができる。その環境の中で、幼児は様々な遊びを豊かに繰り返し広げて確かな学びを重ねていくことができる。

教師がこの指導と評価の作業を積み重ねることで、結果として幼児は多様な経験をし、P20のように評価を表の中に記入してみると、教育期間が終了する時には全ての枠に経験した内容が記入されることになり、幼児の育ちがより確かになっていくと考える。

以上のことから、教師が視点をもって評価・反省することで指導が改善され幼児期の学びをより明確にできるのではないかと考える。

また、幼児の学びの観点を小学校の学習の評価の観点と関連させることが、幼稚園教育と小学校教育の接続につながると考える。

これらの考えを基に、幼児一人一人の評価を積み重ねると同時に学級・学年の育ちについて評価・反省し指導計画を見直した。そして**幼小の接続を視野に入れた教育課程編成のための資料**に基づき教育課程を見直し、幼小の接続を視野に入れた教育課程へと改善した。

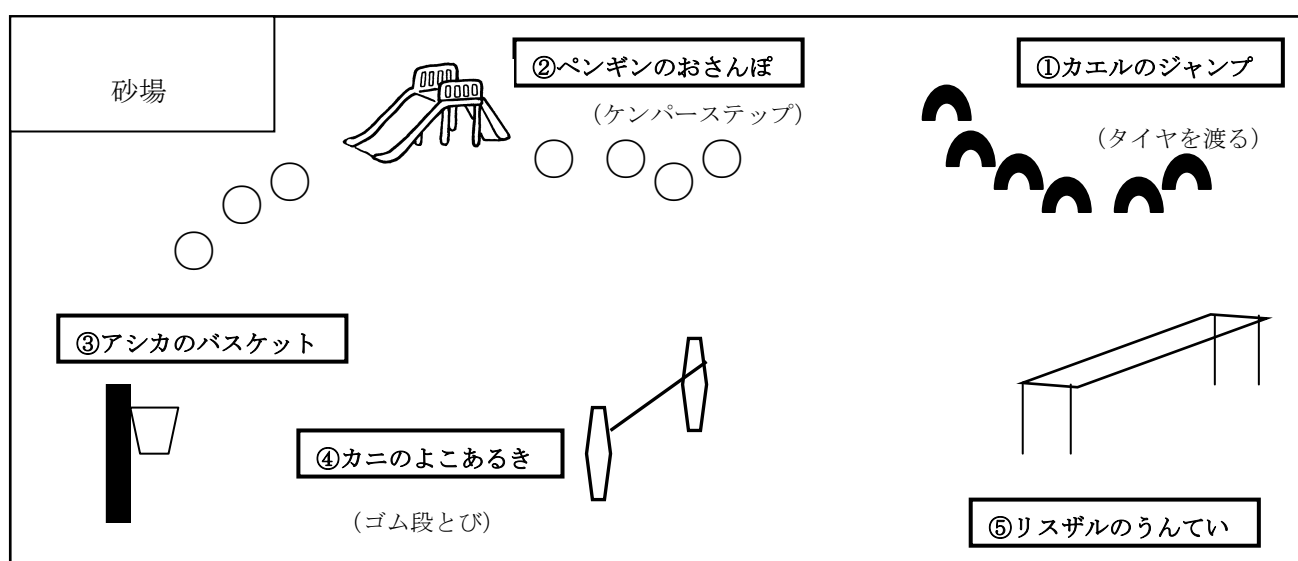
具体的な幼児の活動と評価の事例（平成17年度本園研究報告書より）

挑戦する楽しさに夢中になっている事例

2年保育5歳児 6月中旬 活動名「サーキット」

6月上旬、園庭にできた新しいタイヤの遊具に夢中になり、何回も繰り返し渡っている。タイヤの間隔が広いため、年少児がタイヤとタイヤの間にビールケースを置いて歩いて渡っているのに対し、年長児はビールケースなしで広い間隔を渡ろうと挑戦することを楽しむ姿が見られる。このような姿から、挑戦したり試したりする楽しさや思いきり体を動かす心地よさを味わい、自分の自信へとつなげていってほしいという願いをもった。

そこで、新しいことに不安を感じる幼児も、運動の心地よさや挑戦する楽しさを感じて取り組みやすいように、水族館遠足をイメージしたサーキットをつくり、遊ぶことにした。



子どもの姿

子どもの姿

幼児が学んでいたこと

① [カエルのジャンプ] (タイヤ渡り)

- ・ 「できないよー」と言いながらも、友達と何度も挑戦
- ・ タイヤの間隔が一番狭い所だけ、跳び移って止まることができるようになる。
- ・ 他の場所にも挑戦してみようとする。
- ・ いろいろな跳び方がでてくる。

「タイヤに手をついて側面跳び カエル跳び
駆け足跳びをする幼児 跳び箱跳び」

幼児が学んでいたこと

- ・ 「できそう、やってみよう」という気持ち♥
- ・ タイヤ間の距離、力の調節、バランス等の身体感覚を感じたり身に付けたりしている★
- ・ 自分の課題に繰り返し挑戦する♥
- ・ イメージを表現したり、いろいろな動きに挑戦したりして、体をコントロールして動かす技能やその基となる感覚を身に付けている★

写真

IMS_1111

② [ペンギンのおさんぽ] (ケンパ、滑り台)

- ・ 全員が出来る。
- ・ 「これが一番楽しい」と言う幼児も。

- ・ 「これならできる」「ちょっと一休み」という安心できる場所となっている♥
- ・ 高低差があり、滑り降りる爽快感を感じている♥

IMS_1096

写真

③ [アシカのバスケット]

- ・ 近くで投げたり遠くで投げたりする。
- ・ 入りそうで入らない。
- ・ 「あう、あう」とアシカの真似をしながらボールを投げる。

- ・ 以前からある遊具が、サーキットの中に位置付いたことで意欲をかきたてられている♥
- ・ 目標に向かって、力をコントロールしながら投げる技能や、その基となる感覚を身に付けている★

④ [カニのよこあるき] (ゴム段とび)

- ・ 「もっと高くする?」「そのくらい」と、ゴムの高さを変えながら挑戦している。
- ・ いろいろな跳び方がでてくる。

両足跳び 逆立ち跳び
忍者跳び (両足でゴムの上に乗る)
側転跳び、等

- ・ 出来そうな高さを予測している◆
- ・ 跳ぶタイミング、飛び越える力等を身に付けている★

写真

IMG_1105

or 1103



○こんな飛び方もあるよ! (友達と一緒に挑戦)

最初は「カニ、カニ」といいながらゴム段をまたいでいた幼児たち。

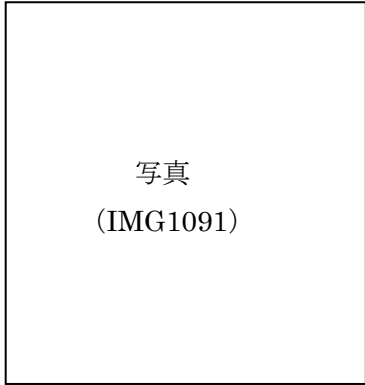
A児がピョンと跳び、両足をゴムの上に乗せて、「忍者跳び!」と喜んでいると、「(そんな跳び方) だめなんだよ」とB児がいう。「いろいろやっていいんだよ」とC児が答える。

これをきっかけに、「触らないようにやってみよう」「もう少し下げてみよう」と友達とゴムの高さを調節しながら、「回転とび!」「僕は一番上の高さでやる!」「二人飛び!」「今度は三人一緒に跳んでみよう!」等と、次々にいろいろな跳び方に挑戦し遊ぶ姿が見られた。

- ・ 自分たちで遊びを変化させて、遊びをより面白くする力◆
- ・ 友達の刺激から遊び方が広がり、友達と一緒にやったらこんなこともできた!うれしい、という思い♥
- ・ 遊具に手を加え条件を変化させることで、様々な動きを生み出した♥◆

⑤ [リスザルのうんてい]

- ・ 両手でぶらさがり前の棒に移ろうとするが、「うー、だめだ」と落ちる。もう一度挑戦する。
- ・ 一生懸命渡っている友達に、「がんばってね、Dちゃんザル」と声をかけたり、「おサルって、もっと早いよ」「体をゆらして進むんだよ」とアドバイスする。
- ・ 友達が片手交互で前進していくのを見て、自分もやってみる。
- ・ 「痛い、手が痛い」と言いながらも、「これ、難しいから挑戦しているんだよ」と言う
- ・ 繰り返し挑戦する幼児が多い。
- ・ いろいろな進み方(一段ぬかし、横進み、後ろ進み、回転進み等)



- ・ 悔しさを味わいながら挑戦し続ける。「またやってみようかな」♥
- ・ 遠足で見てきたサルのイメージを、言葉で伝えている★
- ・ 他児の姿に刺激を受けて、自分もやってみようと思う♥
- ・ 難しいからこそ挑戦する楽しさを味わい、がんばっている自分を認めている♥

○難しいけどやってみよう！（E児の挑戦）

雲梯の所で「がんばるぞ」と小さくつぶやき、両手でぶらさがる。「うー、だめだ」と落ちるが、また「がんばるぞ」といってぶらさがる。これを繰り返し、最後の所まで来て「これが最後だ」と顔を真っ赤にしているが最後も落ちてしまう。

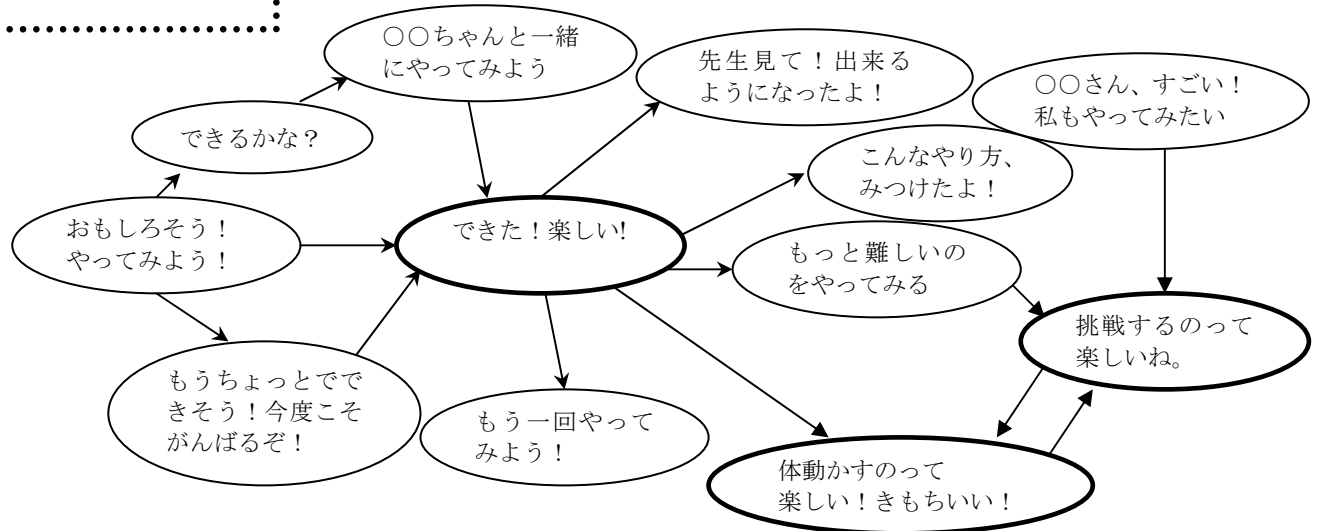
次はタイヤへ。E児はこれまでも幾度もタイヤ跳びに挑戦しているが、教師が手を添えないと跳び移れなかった。今回もびよんと跳び移ろうとするが、勢いがついて止まれず落ちてしまう。「あー」と言いながら、次のタイヤへ行き同じようにする。タイヤの間隔が一番狭い所だけ、跳んで止まることができると「わっわー」とできた自分に驚いている様子。

他の遊具にもいくが、再びタイヤへ戻ってくる。教師「次のタイヤでストップするのよ」E児「できないよ」と笑顔で言う。E児はいくつかを跳ぶが、勢いがありすぎて飛び出してしまう。しかし、次のタイヤの上でちょうど止まることができ、「あ、できた」とにっこり。

何回も繰り返し挑戦。5個目までは行きすぎて落ちてしまうが、6個目は跳び乗れるようになる。教師に「ねえねえ、ここ見てて」と言って跳び乗って見せる。「すごい！」と教師が言うと、「だって、一番（タイヤの間が）狭い所だもん」と嬉しそうに言う。

領域	関心・意欲・態度をはぐくむための体験	思考力・判断力 知識理解力をはぐくむための体験	遊びを楽しくするための技能・表現力をはぐくむための体験
健康	体を動かして遊ぶ楽しさ、挑戦する楽しさを感じる。		力の調整・バランスを感覚的につかむ。
人間関係		みんなで順番を守りながら遊ぶ。	
環境	新しい遊びに意欲的にかかわり、繰り返し取り組む。	タイヤの間隔(広い・狭い)が分かる。	
言語			出来たときの驚きや喜びを教師に伝える。
表現			

幼児の気持ちの流れ



(1) 幼児の学びについて

- ・[水族館をイメージしたサーキット] という新しい遊びに、興味をもって取り組み体を動かしながら遊ぶことを楽しんでいた。♥
- ・動物のイメージがきっかけとなり、「こうしたらもっとおもしろい！」「こんな動きもあるよ！」と遊びや動きを工夫することによって、新しい技能と出会い、その技能やその基となる感覚を獲得していた。★
- ・幼児たちは、自信をもってできる動きよりも、「もう少しで出来そう！」という動きに夢中になり繰り返し挑戦していた。その中で“挑戦することの楽しさ”“自分の力を出すおもしろさ”を学んでいる。♥★
- ・友達と一緒に取り組む楽しさ・友達の動きの刺激・励まし等が、更に「やってみよう」という意欲を引き出していた。友達のしていることが面白そう、一緒にやってみよう、という思いが協同性をはぐくんでいる。♥

(2) 教材・援助について

- ・日常生活の中では経験しにくい動きを意識して組み立てた、常設ではない環境の魅力が、新鮮な気持ちで意欲を集中させた。
- ・[カニの横あるき] (ゴム段とび) では、ゴムをつける柱をペットボトルで組み合わせ、幼児が持ちやすく、ゴム段の高さを自由に調節できるようにした。その結果、サーキット遊び後も、好きな遊びの中でこの遊具を持ち出し、様々な跳び方に挑戦している姿が見られた。自分たちで扱うことができ手を加え条件を変化させることができる遊具は、様々な動きを生み出し、幼児たちの遊びを夢中にさせることにつながる。
- ・自分たちで遊びをつくりあげていく力をつけるためには、様々なやり方や挑戦しようとする姿、出来たことを認め合う学級作りを行っていくことが、大切な援助だと考える。
- ・滑り台のコーナーは、挑戦というより息抜きの場所であり、運動にあまり興味をもてない子も、自分も挑戦する遊びに参加している意識をもって楽しむことができる。みんなで挑戦する遊びを構成する場合には、このような場所も必要である。

